



〒892-0841 鹿兒島市照国町13-42 カトリック鹿兒島司教区 電話099 (226) 5100 振込口座 02030-2-8359 編集発行 教区広報部 1部60円年間千共1100円



司祭たちが家庭について学習

高見大司教を講師に「司祭のための聖年」

いつくしみの特別聖年期間の行事として「司祭のための聖年」が7月12日(火)から2日間、教区本部で行われ、郡山司教をはじめ教区内の司祭、助祭が



参加した。講師は高見三明長崎大司教。内容は、「教会と現代世界における家庭の召命と使命」を議題にして昨年10月開かれた第14回世界代表司教会議(シノドス)の内容とこの会議後、教皇が出した使徒的勧告「愛のよろこび」(邦訳中)について。日本の代表としてただ一人出席した大司教は、最初に会議期間中の様子を豊富な写真で紹介した後、使徒的勧告について説明した。

14人が受堅

谷山教会

7月17日(日)谷山教会では堅信式があった。受堅したのは谷山教会だけでなく始良教会、ラサール学園の生徒なども加わり14人。郡山司教は、ミサの中で

「結婚と家庭の福音」を深め、具体的な司牧的方向性を提供している。多くの人が、教会の教えがイエスのメッセージを反映したものと



に足を運んで欲しい。イエスと共に歩む人生こそ、本当の人生だ」とメッセージを送った。ミサ後は、ホールで茶話

第38回総会を終えて

奄美カトリック女性連盟

7月3日(日)奄美カトリック女性連盟では、第38回総会を大笠利教会で開催した。奄美にある七つの小

教区の女性がキリストを証しするために毎年一堂に会することは大切で意儀のある行事だと考えている。午前の部では日カ連の「いのちを守る運動基金」からの支援金を今年も「ゆづり葉の郷」に贈呈した後、

議案の審議が滞りなく行われた。午後の部では、今年の総会テーマの「神のみ旨に基づく家庭づくり」について

「いつくしみの特別聖年」でもある今年には私たちが女性として、また母親として神のいつくしみを深く理解し、神の愛を分かち合い、少しでもみ旨を生きていくようにと、イエスのカリ

タス修道女会のクロティルデ川端千鶴子修道女に「いつくしみの特別聖年にあたり、人々との積極的な交わりを！」という演題で講演してもらった。

40余年間ブラジルで宣教活動をしてこられたシスターの話は私たちが周りの人々とかかわる上で大切なヒントとなった。実は笠利教会ではこの日一人の女性信徒が神のもとに召された。私たち奄美連が聖堂を使用していた関係で葬儀ミサができなかった

彼女のために、総会の感謝のミサで、顧問司祭の永山神父の配慮もあり彼女の安息のために一緒にミサをささげた。

38年にわたって緒先輩方がつないでくれたこの奄美連の存在は、今生きている会員だけでなく、亡くなった会員のためにも大きな意義のあることだと思ふ。この活動を絶やすことなく続けていくことが私たちの大きな役割であることを強く感じた総会となった。(事務局 久保正子)

2016年

ザビエル上陸記念祭

8月15日(月)ザビエル教会

16時 受付
16時30分 平和の鐘を鳴らそう
17時 ザビエル上陸記念ミサ
18時30分 懇親会

のため、また人々が愛をもつて助け合うために、希望と光を与えてくれる勧告である。邦訳の完成が待たれる。(報告 末吉卓也)

会があり、その席で受堅者を代表してラサールの橋本佑太郎さんが「学校で岩崎先生という素晴らしい先生に出会い、洗礼を受けることができた。今日、堅信を受けた私たちが信仰のう

降誕祭に向けて

典礼研修会

7月10日(日)午後、教区典礼委員会主催の典礼研修会がカテドラルで行われた。今年実践的な研修をしたらどうかということ

で、降誕祭と復活祭をより豊かに準備し祝うために、各小教区の実践から互いに学び合うことにした。今回のテーマは「主の降誕に関する」。事前に各小教区にアンケートしたことをもとに進められたが、回答数が少なかつた。参加者は市内を中心に6小教区19人。アンケートの結果に基づき、三つの班に分かれて実践例を分かち合った。分かち合いの後の報告の主なものは次の通り。

①案内状：教会から遠くにいる人に出して

「短信」

▼鹿屋教会で堅信式
7月3日(日)鹿屋教会では堅信式があり、8人がその恵みに浴した。「3面に関連記事」
▼フリチエル神父追悼ミサ
6月11日(土)に帰天したレデンプトール会のW・フリチエル神父の働きに感謝するミサが7月16日(土)午後、ザビエル教会でさげられた。

ザビエル祭 前祭 講演会

「聖F・ザビエルと鹿兒島」
講師 平林冬樹神父 (イエズス会)
場所 ザビエル教会

8月7日(日)

受付 13時20分 開演 14時

第25回夏期集中講座

鹿兒島教区主催

テーマ「光のなかにイエスの顔があるから」

日時：8月22日(月)～26日(金)
午前の部10時～12時
午後の部19時～21時(午前と同内容)
場所：鹿兒島カテドラル・ザビエル記念聖堂1階ホール

講師：竹山昭神父(ザビエル教会主任司祭)
受講料：1人 500円(受講回数に関係なく) 受講当日に受付へ

申込：教会・修道会ごとにまとめてファックスか郵送で。

※不都合な方は当日も可

申込先：〒892-0841 鹿兒島市照国町13-42 鹿兒島教区本部「夏期集中講座」係 FAX099 (225) 0440/TEL099 (226) 5100

※自分の聖書持参。できれば旧約聖書つき。

③宣教：喜びをどう伝えるか。どう迎えるかの準備の時間を取る。
切羽詰まってるから準備するのマンネリになりやすいが、今年はその意識を持って時間となった。

ある信者さんが「我々信徒はザビエルにはなれないがヤジロウにならねえ！」と言った。司祭を案内してきたヤジロウは信徒の目標かもしれない。鹿兒島出身と言われるヤジロウだが彼には謎が多い。ここに掲載する一通の手紙は、ある一家に伝わる伝承のようなもの。だがこのまま放置するにはあまりにも惜しい内容。そこであくまでも一つの「お話」として紹介したい。

きつかけ

30年数年前、当時ザビエル教会の主任司祭だった田邊徹神父(引退・指宿市在住)のもとに手紙が寄せられた。それは鹿兒島市山田町に住む川上矢吉さんという方からもので、彼は島津家に仕えてきた川上忠兄家の末裔で、その川上家には代々伝えられてきたことがあり、封筒の中には「参考までに」と言い伝えを書き記した手紙と古い書のコピーが入っていたという。

受け取った田邊神父だったが、なかなかその手紙を詳しく読み解く機会に恵まれず、時が経過。引退し「恵の丘(長崎教区)で過ごしていた時に、鹿兒島教区史をまとめるために収集していた資料の中にしまい込んでいた川上さんからの手紙を再発見し熟読。その内容に驚いたという。すかさず田邊神父は教区本部に連絡し、「川上矢吉さん宅を訪ねてこれまで手付かずで



矢吉さん宅にあった書(取引に使ったものらしい)。中央に「川上弥二郎」の名前が見られる

いたことを詫びて来て欲しい」と依頼。そこで職員が足を運んだ。格式の高い家だったことを思わせるように敷地内に道場を持つ川上矢吉さん宅だが、矢吉さんはすでに亡くなっており、向かいに住む息子さんに足を運んだ事情をお話した。

一通の手紙から考える

ヤジロウの素性と川上久恒の殉教

ともできなかつたため矢吉さんの逝去とともに処分したとのことだった。「もしかするとザビエルに鹿兒島行きを決定させたヤジロウにつながる

手紙。(記憶や言い伝えであるため、年代などが前後するなどしているが、少し、ヤジロウに近づいたようである。)

川上矢吉さんの手紙

願
有候
上原居助
分三百拾人
御申越候
川上弥二郎
右之通願出也
新納内蔵兵衛
一月二十七日

源頼朝の庶長子・島津初代忠久の頃は、公方と武家方の攻防は激しくなり、忠時の代まで鎌倉に在りしも、文永11年(1274)10月、三代久経の時、蒙古襲来時に久経、幕府の命を受け、任国に下向、異国警護番役勤任となつた時は建治元年(1275)であった。

島津忠時
忠宗、貞久、元軍二回の来寇に大いに武功を立て、元

資料があつたかも」と、素人ながらも残念に思つた。矢吉さんが参考までに伝えてきたのは、あくまでも言い伝えとして記憶しているものを何らかの資料と照らし合わせたものだろう。年代など前後するなど、信用性はさほど高くはないと思われるが興味を持てるものだった。

軍を打ち破り武力をますます強くしたために、勢いに乗じ島津荘に下向し九州の豪族を制覇するに及び、九州の地に戦乱の日々が続き、ついに豊臣秀吉の薩摩成敗をすることとなり、島津軍は今まで幾多の戦費と秀吉との戦に多くの軍費も使い果たしたのである。そしてまた秀吉の朝鮮征伐を起すに至り、島津軍も渡鮮、大いに活躍し大功を立て、終戦にあたりては全軍の殿を務め名声を高めたが財政は苦しく、秀吉の没後起こつた家康との戦、すなわち「関ヶ原の戦い」には西軍の石田方に余儀なく味方したので、開戦前夜、島津の軍議で薩摩の兵法を西軍に進言せしに石田方の大将島左近らの薦めに

康の平和外交にも熱心に進展したので、財政に苦しんだ薩摩も活気を得、ますます南方海上を自由自在に活躍して薩摩倭寇の名を大にしたのである。然るに徳川方も外様大名たちの財政のよくなるのを恐れ、家康の没後、寛永の鎖国令が出るに及ぶ一つには切支丹の勢いもあるとし、弾圧し犠牲者の多くを出すに至る。秀吉や家康以来40年間くらいの間、薩摩も盛大な時代が続いた。また久恒親子の武名も海賊たちの間では薩摩倭寇の名を恐れさせたのである。

川上久親

(弥二郎、矢二郎、ヤジロウ、アンジロ)
天文15年(1546)、屋久島に配流。その後、跡絶。マラッカにおいて切支丹の洗礼を受ける。洗礼名メンデス。

武芸は幼少より鎌倉武術

十八番を学び、影之流剣術、弓、馬、槍、水練の技、妙に達す。薩摩藩には家伝の厳しい掟があり、代々子孫相伝へ堅守し、侵す者は切り捨て御免をもつて処罰したのであつて、藩を他国に見ることのできない、「一死を以て報じ」一致団結の大集団を作り上げたので、即ち島津の親衛としていつも殿の身辺を離れず、薩摩家族的集団は700年にわたつて他国人の侵入を許さず不動のものとなつたのである。

川上久親とザビエル
天文18年(1549)7月22日、6人の異国人は青い目をした黒衣の日本最初上陸のキリスト教伝道者フランシスコ・ザビエル一行であつた。

2016 Canossa Youth Day in 九州

日時：10月29日(土) 10時～30日(日) 16時

会場：「福岡黙想の家」(〒811-4155 福岡県宗像市名残 1056-1 <http://fmokuso.com/>)

講師：暮林 響神父様(神言会)

対象：青年男女(18歳～35歳)

参加費：5,000円

申込先：〒156-0045 東京都世田谷区桜上水2-5-1 カノッサ修道女会
TEL.03-3329-3364 FAX 03-3302-1297
E-mail: canoyouth@gmail.com
<https://www.facebook.com/canossajp/>

申込〆切：10月15日

た。彼を鹿兒島に案内したのは殺人を犯して薩摩からマラッカへと亡命していた青年弥次郎であった。初め薩摩に上陸し南林寺に貴久と奥方に拝接し、親類、朋友、家臣たちを集め、150人余の人々はザビエル滞在中、皆、洗礼を受けたのである。ザビエルは10か月くらい鹿兒島にいたが、ポルトガル船が平戸へ入港するため鹿兒島を去つた。その目的は京都であった。

広報部から

川上家の歴史をできる範囲で調べてみたところ、川上忠兄の生存期間、その子とされる久恒、またその子とされる矢吉さんが「ヤジロウ」ではなかつたかと思われる久親の生存期間に歴史とズレがあります。

また手紙の中でも久親が活躍した時期の長さにあまりにも無理が見られます。ですから歴史的な資料とは言えない手紙なのでしょう。しかし、このような言い伝えが残っているというところに、ヤジロウの存在を身近に感じ、近い将来、その素性が明らかになれば良いと願っています。

郡山司教の教区評議会に向かう心 新しい宣教へのヒントと取り組み 鹿屋教会に見るフィリピン人共同体

今年の教区評議会のテーマは、「いつくしみの特別な聖年にあたり、信仰の伝達と班制度のあり方を見直す」。後半だけ聞くと、「古くて新しい課題ですね。難しい問題です」で終わってしまいそうですが、「いつくしみの特別な聖年にあたり、がつくと新味が倍増して、思わず「えっ？」と顔を上げたくなります。今どきの時宜を得た課題という感じになります。教皇フランシスコ効果ということになるでしょうか。実際、少なくとも教会の中では、「いつくしみと言えは教皇」というほどに、両者一体となつて浸透しているように思います。



司教を囲んで喜びの記念撮影

7月3日の鹿屋教会での
「いつくしみの特別な聖年にふさわしい取って置きの話をまず皆さんに分かち合いたいと思います。新しい宣教のヒントになると思うからです。」
「鹿屋カトリック教会」と英語で染め抜き、鹿屋小教会の一員であるという所属意識も表明していただきました。主任司祭が喜んでの言うまでもありません。実は、こうした6人もフィリピン人

堅信式は歴史的と言っているほどに特筆すべきものでした。地元信徒2人に、なんとフィリピン人信徒が6人も堅信の恵みにあずかったのです。鹿屋教会ではかつてない快挙と言つていいでしょう。皆さんは、三つの賛歌をはっきりとした日本語で元氣よく歌っていました。あまりにも完全な日本語ミサに感動したので、急ぎよ、主の祈りをタガログ語でも歌ってもらうことにしました。突然聞きなれない歌が歌われたので、地元の皆さんは「何の聖歌だろう」と思ったようですが、ミサ後のパーティーで当事者たちは「初めてミサで歌った」と喜んでいました。当日は、小学校低学年から高学年までの10数人の子供たちが来ていました。ほとんどの子供たちは洗礼を受けているようでした。何よりも、真っ赤なおそろいのいつくしみのTシャツを着て祝福に駆け付けたフィリピンレディーたちは明るく、アットホームな雰囲気の中で教会に溶け込んでいたように感じました。Tシャツには「鹿屋カトリック教会」と英語で染め抜き、鹿屋小教会の一員であるという所属意識も表明していただきました。主任司祭が喜んでの言うまでもありません。実は、こうした6人もフィリピン人

信徒が堅信を受けるに至った背景には、ちよつとしたエピソードがありました。それは、主任司祭が同行した昨年8月の一泊旅行による大分フィリピン人共同体との交流会を巡つてのことです。すなわち、鹿屋に帰つたみなさんは、早速、自分の共同体に倣つて、貰い受けたいつくしみの御絵の前に集まり、いつくしみの祈りの集まりを始めたのです。すると、これまで数人にとどまっていた主日のミサ参加者が倍増し、堅信を受けたいと名乗り出る人が



日本人もフィリピン人も入り混じって家庭的な雰囲気いっぱい

続出して当日の盛大な堅信式となったのでした。そんな一連の流れを聞きながら、私は、新しい宣教のヒントを見つけたように思いました。将来の教会のあるべき姿を見たと言つてもいいと思います。そして、「英語やタガログ語のミサを何十年続けても、小教区に馴染まないフィリピン人信徒たち」と、そんなレッテルを張つていた自分を恥じました。日本人と結婚し、日本人社会の中で生きていく彼女たちは、教会の中でも日本人信徒と一緒に生きていきたいと思つていたに違いありません。鹿屋教会での宣教を考へる際に、鹿屋での事例をもとに、「フィリピン人信

宗教を超えて共に平和を祈ろう！ 6日に宗教者懇話会が平和巡礼を実施

神道や仏教、キリスト教という宗教を超えて互いに信頼関係を築き上げることを目指して2011年に設立された「鹿屋島宗教者懇話会」では、8月6日(土)平和巡礼を企画し、多くの宗教者、そして信徒たちの参加を求めている。これは世界各地でテロや過激な犯罪が起こる背景に少なからず宗教がかかわつ

ていることを認めざるをえないとする「鹿屋島宗教者懇話会」が、広島に原爆が投下され、鹿屋島では「8・6水害」に見舞われた6日にお互いの宗教を尊び、手を取り合つて世界平和を祈ろうとするもので、鹿屋島市内の異宗教の施設(東本願寺、ザビエル教会、照国神社)を平和巡礼する。この企画には同会

徒とどのようにしたら小教区共同体を築けるか」を考へるのは具体的で現実的な取り組みになるのではないかと考えました。考えてみますと、ほとんどの小教区には多くのフィリピン人信徒がいますが、教区としてこれまでに一度も取り上げたことのないテーマです。不思議なくらいです。いつくしみの特別な聖年にあたり、最もふさわしいテーマだと思ふようになりました。この人たちと、共に生きていく教会づくりを目指してほしいと思ひます。

のメンバーだけでなく、鹿屋島ユネスコ協会や鹿屋島被爆者協議会なども加わる。平和巡礼は原爆の灯火を先頭に午後5時に東本願寺(鹿屋島市新町)をスタートし、ザビエル教会、照国神社を巡り、終点の中央公園で祈りをささげることになっていく。またそこでは平和のコンサートもある。終了予定は午後8時。巡礼には、どこからでも参加できるということで、カトリックからも大勢参加して欲しいと訴えている。

+KABAYAN SEKSYON+
Ang mga Dukha: Mga Katalusan mula sa Asya
Ang kalipunan ng mga Asyanong Obispo (FABC) ay nananatiling nagtataguyod sa taimit na pakikilahok ng Simbahan sa iba't ibang mga tao sa Asya, lalo na ang dialogo sa mga dukha. Kinikilala ng FABC na "karamihan sa Asya ay binubuo ng maraming mga dukha."
Ang mga taong ito ay "dukha, hindi sa mga pagpapahalagang pantao, katangian, o kakayahan. Ngunit dukha, sapagkat pinagkakaitan sila ng pagkakaroon sa mga material na yaman at pagkukunan sa buhay para maitaguyod nila ang isang makataong pamumuhay para sa kanilang sarili. Pinagkakaitan, sapagkat nabubuhay sila sa paniniil, sa ilalim ng mga istrukturang panlipunan, pang-ekonomiya, at pampolitika na punong-puno ng kawalang-katarungan."
Ang pakikisangkot ng Simbahan sa mga dukha ay nagiging isang paraan ng "dialogo ng buhay." Kailangan nito ng "pagkilos, hindi lamang para sa kanila (sa diwang paternistiko), kundi kasama nila, para matuto sa kanila (sapagkat marami tayong maaring matutuhan sa kanila)...at magpunyagi para sa kanilang kaganapan ng buhay, sa pagpapanibago ng mga istrukturang ito at mga sitwasyong ipinapako sila sa kadahupan at kawalang-kapangyarihan." Ang pakikisangkot na ito ay nagaambag sa "buong pangangaral ng Ebanghelyo, lalo na sa Asya" (FABC 1).
Maraming mga dukha dito sa Asya ang hindi nabibigyan ng pansin. Marami sa kanila ay itinatakwil dahil sa kanilang kalagayan. Kaya maraming mga dukha ang lumalayo sa pananampalatayang Kristiyano dahil walang mga kapwa Kristiyano ang tumatanggap at kumikilala sa kanila bilang mga kaanib din ng Simbahan.
Mabago sana ang sistema ito sa lipunan dahil kung hindi maraming mga dukha ang mahuhulog sa paggawa ng hindi mabuti, mapapasama ang kanilang buhay. Sana ang mga kapatid sa pananampalatayang Kristiyano Katoliko ay magising at makita ang kalagayan ng ating mga kapatid sa pananampalataya. Sila ang mga dapat bigyan ng tuon ng pansin para sila din ay makaranas ng pagkakaibang buhay dito sa lupang ginagalawan at sana maging bukas tayong lahat sa pagtanggap sa sinumang lumalapit sa atin para humingi ng tulong. Maging bukas tayo sa pagmamahal sa kanila, ang mga dukha.
Katesismo sa Taon ng mga Dukha (Fr. Dino Orolfo)

会 と 催 し (8月)

- 1日(月) アルフォンソ祭
 - 2日(火) 子ども大会「聖書学校」・カリタスの園(宮崎市)・4日まで
 - 3日(水) ルーシオン神父命日(一九九四年)
 - 6日(土) 主の変容
 - 7日(日) カトリック平和旬間始まる・15日年間第十九主日
 - 8日(月) ザビエル講演会(平林冬樹神父)・ザビエル教会・14時(開場は13時20分)
 - 10日(水) 小平卓保神父命日(二〇〇五年)
 - 12日(金) 田原章神父命日(聖ドミニコ)
 - 14日(日) 聖ラウレンチオ助祭殉教者
 - 15日(月) 教区本部夏期休暇・15日年間第二主日
 - 16日(火) 聖母の被昇天
 - 21日(日) ザビエル上陸記念祭・ザビエル教会・16時30分
 - 22日(月) 教区巡礼委員会・教区本部・19時
 - 28日(日) 第二十一主日
 - 30日(火) 夏期集中講座・ザビエル教会1階ホール・16時
- 祈りの意向
- 【ノベナ】平和のため(8日~17日)
 - 【祈祷の使徒会】世界共通・スポーツ
 - 宣 教・福音を生きる
 - 日本の教会・真の平和の実現

熊本地震被災地でのボランティア活動

教区大神学生

車窓に映った熊本城にかつての威容はなかった。崩落した屋根瓦や石垣、100mにも渡って拉げたように倒壊した白壁。武者振りを失い、去勢されたかなその佇まいに、あの日の地を襲った揺れの凄まじさを見た。夕暮れを背景に実際、その影は心許ない。繁華街の煌めきが際立ち、その対照に心動かされたのである。

心動かされずにすまない。ボランティア活動したのには独居老人の家だ。いまは村を離れ都市部に暮らす長男夫婦が帰郷、作業中には笑声さえ湧く。一方その真向かいの、屋根をビニルシートで被った家屋の庭先ではひねもす、隣家の老人の一人ぼつねんと座すのを見た。心動かされたものの、無闇に声をかけるのも憚られた。

翌朝、カリタス福岡・熊本支援センター(菊池教会)から西原村に。同村は熊本県北東部、阿蘇外輪山の西麓にある。あの日、震度7の揺れに襲われた。家屋倒壊などによる犠牲者は5人。農業用の大切畑ダムでは漏水、田畑の至る所に、震源となった布田川断層による地割れが。被災地支援ボランティアで入った活動現場周辺は、いままも断水が続いていた。

「あの時、東北にいらしたのですか」。帰路、バス停で声かけられた。Tシャツの背に印された「3・11」を見、年配の夫婦が感慨深げ。「夫は宮城の出身です」。5年前、夫の故郷を喪失。今回、妻の実家が被災したという。支援活動に来ていと知って丁寧な辞儀をする二人。バスが停留所を離れたとき、夫婦共々合掌、あらためて深々と辞儀をし見送るすがたを窓越しにみとめた。熱いものがこみ上げた。心動かされてならなかった。

倒壊危険家屋の、割れた窓ガラス、歪んだサッシ、テーブルやタンスなどの家財道具を軽トラックに積載、災害廃棄物処分場(村民グラウンド)へと運ぶ。数メートルに渡り倒壊し道路に横臥したコンクリート塀を粉碎、やはり処分場へと運搬。処分場には、木材、コンクリート、金属など、村民の生活を見守ってきたであろう建材や品々が重機によって粉砕・分別され、所狭しと堆く積まれている。まさに人びとの破壊された日常がそこに。

4月14日午後9時26分、同日午前1時25分、いずれも気象庁震度階級最大の震度7を記録した「平成28年熊本地震」。その後最大震度6強を2回、6弱を3回記録、いまま余震が続く。死者49人、関連死疑い20人、行方不明1人、負傷者1684人(5月24日現在)。避難者は最大時、18万人を超え、被害総額は最大4・6兆円に及ぶ。

しかしこうした数値は、聞く者の心を動かすはすれど、肉感に乏しい。被災状況も阪神淡路(1995年)や東日本(2011年)の

ように、惨状明らかな面的なものでなく、点的もしくは点の集積であるため、傍目には判然としにくい。全壊家屋の隣に健在家屋をみとめるなど、熊本城と繁華街との対照のように、物理的にも心理的にも日常と非常の深刻と複雑がある。そこに悲劇と闇が広がり、人間個々の、また人間どうしの葛藤も生じている。

崩落し山肌露な森林。亀裂の走る田畑。倒壊した家々。崩壊し道路を半分埋める石垣や塀。これらに心動かすのは容易い。だが、日々誇りと仰望したであろう城郭の、衰残を傍らに日常を営む人。已むなく家財道具を廃棄、いずれは家屋も葬らねばならぬ人。はや新生活へと移行した人の傍ら、いまだ企図なく途方に暮れるばかりの人。家族を失い、故郷を失い、形をとどめる思い出の悉くを失った人。このような人びとの

いることを日常、心に留めて生活することは決して容易いことではない。

現場に立つ自らが腹立たしい。心動かすだけ、かれらの何を理解できるというのか。同情も共感も、哀惜すらおこがましく、心動かすだけなら、被災地狙いの空き巣であれ、義援金と騙る詐欺師であれ、人並みに動かしはするだろう。ただかれらが、心はたらかすこ

永井博士の書

吉野教会

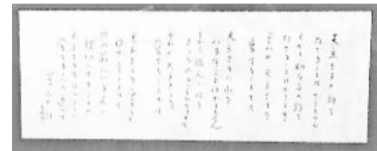
吉野教会の主任司祭アントニオ鄭法鐘神父様は、韓国の神学校で人生を変える一冊の本に出会いました。それは『長崎の歌』という永井隆博士の生涯を書いた本で、長崎の原爆で愛する妻を失いながらも神様を恨まないで、むしろ神様に感謝する永井隆博士の信仰に、神父様は大きな感動を受けました。この本がきっかけで日本や日本の教会に関心を持つようになった神父様は、日本へ行き神父に

とはない。だから、心ないことに手を染めて悪びれないのである。

心動かすのではない、心はたらかせなければ。支援という観念のために心動かすのではない、心はたらく工夫からの、生きた支援でないならばたして、偽善に終わる。いままとめられてい

なりたいたいという考えを持つようになり、その後郡山司教様の助けで鹿児島教区へ来て神父になりました。

ところが、今年吉野教会にいられた神父様は、偶然吉野教会の幼稚園で永井隆博士が生前に直接書いた文書を見つけたのです。その文書は次のようです。



「天主さまの頭をなでることはできません。しかし幼な子の頭をなでること」と

文芸

短歌

始良教会 川口節子
弟子たちの心に光となり給う主のみことばと共にあり
たき
鴨池教会 前田儀子
砕け散る夢も集めて妹の
彼岸の壇に庭のこでまり
を手向く
鹿児島純心 川上 和
羊らをひねもす守る羊飼
い迷える羊も肩にのせ
国分教会 市来房枝
吾が描く夢悉く叶へられ

俳句

鹿児島純心 川上 和
喜びの文を手にして古希祝う
吉野教会 徳永ノブ子
七夕の願い慈しむ被災地え
国分教会 政ノブ子
招かれてバザー楽しむ梅
雨一日
始良教会 川口節子
陽に目覚めアサガオ一日
を満開に生き
奄美市 林 常広
何気なく川底見ればボラ
の群れ

「文書の内容は単純ですが、その中には神様と隣人を深く愛する永井隆博士の深い心が含まれているのを感じます。私はまるで時間をさかのぼって永井隆博士に直接会ったように驚いたし、嬉しかったです。神様の驚くべき恵みと摂理だと考えます。永井隆博士の信仰を模範として、私たちも一人、一人の努力とお祈りで鹿児島教区と日本の教会の発展のために頑張りましょう！」

(報告 伊藤典子)

鈴木神父のやさしい言葉

女と竜の話から

黙示録の中には竜に襲われる女の話があります(12・17)。カトリック教会は伝統的にこの「女」にマリア様を読み込んできました。この箇所が産まれた子はすぐに「玉座へ引き上げられた」とされています(12・5)。というこ

りア様ではないという結論に至ります。確かに、この「女と竜」の話は、竜を踏ませるものの表象として捉えれば創世記の蛇を暗示するものとして考えられます(創世記3・15)。また、「鉄の杖」という言葉から、神様に選ばれた者が敵対するものを打ち砕くという詩編の描写を思い起こさせます(詩編2・9、黙示12・5)。しかし「女は男を産んだ」という記述に拘泥す

るとこの話の本質を見失ってしまいます(12・5)。この話で大切なことは、竜が女の「子孫の残りの者たち、すなわち、神の掟を守り、イエスの証を守りとおして出でいった」という箇所にあります(12・17)。ここは明らかに竜がキリスト者に敵対する迫害者であることの隠喩であると考えられます。こうなると一連の話の中で重要なことは、この女がさまざまなかたちで竜、蛇、そしてサタンから守られた、という点にあります。このことから、こ

の女とはイエス様を信じる者たちの集まりである教会を意味する、という仮説が成り立ちます。この箇所は、女が幾多の危険から守られたように、数多の迫害があるうとも教会は神様や神の御使いの助けによって守られる、ということが黙示文学のタッチで描かれていると考えられるのです。

因みに、この話はギリシア神話に登場する女神レイトをモチーフにしたものと言われます。黙示録が書かれた時代には経済が発展し、これを促したギルドには個々の神々が

いました。このため異教的な風潮に染まっていたキリスト者に対する批判が黙示録には込められていると考えられます。この批判は現代の私たちにも向けられているかもしれない。

【参考資料】黙示文学のタッチとは「黙示文学は超世界的な秘密の開示が問題となっている。このため、①夢や幻といった形態をとっている。②本物の体験であるか否かは簡単に決められない。③天使あるいはそれに類するものが登場する。④像、色、数が特別な意味を担っている。⑤著者、及びそれが誰に宛てたものかは不明。といったことが特徴として挙げられる。」